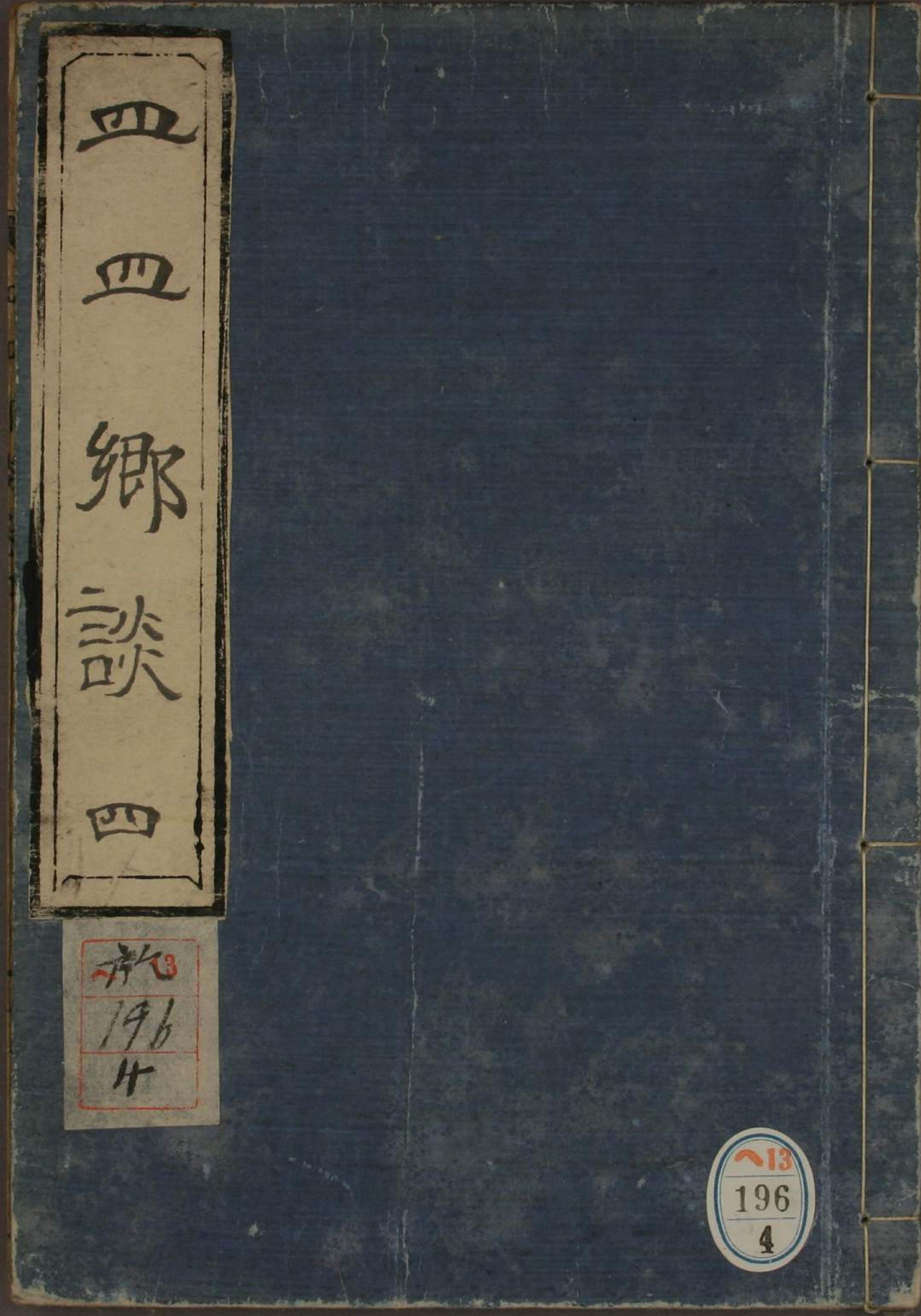


LICENSED PRODUCT  
3/Color  
Black

White  
Magenta  
Red  
Yellow  
Green  
Cyan  
Blue



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 mm  
JAPAN  
Takuma

196

4

平林

四三四 鄉談卷之四

大川 豊

東都

曲亭馬琴編演

鳥夜迷ひて魂を撰

天日洲助が再びの草枕

繼高素大夫宗鄉

織月形の宝刀の盗賊

畠六次索難

旅宿をほこと

三年ぶり

天文十年の夏比俄比

も撰傷再發して

歩行もと難我

なれば草津の温泉よ卦をくじふて湯治をうやぶり、徒然うじふ。

こまくふるゝ旅人と碁を囲むる日を送る。一個の友人江より來る。抑

うきみあるあぐくまくつきつまきしる

上野國五島郡草津の郷よ温泉ゆり。京へ去ると百二十里。武江と去ること

四十八里信濃うる輕井沢より十里ゆき過ぎて。あくまゆり。光泉寺

号と。南の高嶺を背きて。薬師如来の本堂ゆり。所云草津の薬師堂

これうり。堂の前面の西のこゑ。鐘樓ゆり。念佛堂ゆり。東のこゑ。翁母塔ゆり。

又その東と方丈あり。あくまう北へ石坂と。やまと則神社あり。温泉檜湯とぞ  
まうはす。當社の雞栖ハ坂の下御座の湯のほとりより。雞栖ふ並び  
東のまづか。地蔵井を安置せり。又その東ふ覓あり。井幹を置いてある湯と  
受く則これを井戸といふ。井戸よ對ひて御座の湯あり。又その北よ脚氣の  
湯あり。左右ふ熱の湯綿の湯なり。又その前回ふ瀧の湯あり。この湯幹の  
廣大なり。北ふ數間の浴室あり。幹三方よ圍垣と。入口左右よ雞栖をちる。  
湯幹の西よ不動堂あり。此東西よ客店多し。とく中町の北の側。南側と唱  
う。是より下よも客店多し。懸の下町則となり。又その東ふ就する湯  
あり。町の盡處より入山道。信濃路と。三とどらふ道す。彼中町れ南側を。  
南へ登る。立町也。又その南へ新田町。この處ゆも人家多し。町の出ア  
雞栖あり。又中町の南側の東のまづ地蔵の湯あり。あらヒ塞の河原とらふ。  
大日堂あり。不動堂あり。北のまこと馬場といふ。又中町の北側より。西へ  
横巷路を鬼が泉水道と名づけり。あくまう西ふ流水あり。それが隣て  
其昌菴あり。この流水の源を鬼が茶釜と唱えり。南のまづ巨石あり。是  
きん力石といふ。石より東ふ金毘羅堂あり。数十階す。石坂と。兩坂りり  
雞栖を建つ。南よ曝布ゆ。名を同へ。常帶の瀧と。平腹とも。山  
あとう。胎内潛りと喚做を。名を同へ。曝布より東の山間を永谷と唱つ。  
西を仙現山といふ。永谷より南の山の麓ふ。殺生河あり。あのほとくを  
がじ。又正一位白根の神。光泉寺の東南よ。則その本社ゆ。あくまきゆ。  
無縁寺と。阿弥陀堂あり。東のまづ白根明神の雞栖ゆ。雞栖の外周  
隅を新田町の尽處ゆ。西へ在上道。東のまづ澤渡道と。岐道ゆ。此湯

心地へひうつりぐん。近世諸病有效ありとそ。夏より秋のち。やまと。彼此人をす  
まき。山里うづら熱鬧す。また行よ素大夫。合宿もとれ旅客ふ志の  
似うるもなべて。多く人只じはまき。田舎児のまうじ。そぶ中よ彼甚能する  
ふむと。がー。旅人を武士うこえり。武士うこど。商賈うとおり。ふさもうて。わのじひ。あ  
鄙すから。都のよひ。何とく。かね鳥するをのと。彼もよひも好ひふひと。まきを  
りて假染す。友恒を締め行ふ。そお本貫を尋ねり。彼人答て某えす近江の  
きのこ。所縁よ就く下野。赴た。又陸奥よ卦など。まきく相撲を習ひつ。既す  
あがえ。き。二段の幕ふ入りて。紅葉園とす。まきく相撲。わざくも  
不思とどり。左の腕を折れ。其とくさざうのとたゞくとも。おどり。ま  
とみ春儀頃ふ。撲傷起りて。力業ふども。もあひだ人のよと。り。療治へ此彼  
とまきほくせど。果敢とくあく。驗もひきよえ。此草津の湯へとうよ。撲傷ふ  
ゆとり。あく。うなづきとも。えだよとせきと。その隙。あひびく。宿し。一日又  
紅葉園が起臥する。便座舗へり。あひて。えす。ふ四。あて。ゆく。まき  
又周ハ九す。巨竹の六尺ゆま。有く。常ふ坐右。引著て。秘參。もむ。な。  
これぬあく。うなづきとも。えだよとせきと。その隙。あひびく。宿し。一日又  
紅葉園が起臥する。便座舗へり。あひて。えす。ふ四。あて。ゆく。まき  
日本。の。疑ひ。散まぎ。又何の財を期んと。穴と。入。て。浴衣。を。敷。に。竹光。と  
刀を。掲。て。半。つ。遠。く。抜。て。え。ま。か。悲。や。真。の。刃。ふ。ゆ。と。俗。よ。竹光。と  
ふ。呆。と。ぞ。か。と。う。舌。と。吐。た。朝。納。と。あ。新。紅葉。園。彼。巨竹。を。衝。す。う  
ま。る。こ。へ。唐。篠。な。い。何。ひ。ぞ。人。今。あ。た。と。あ。う。よ。と。詰。と。素。大。ま。顔。被。う。  
ま。小。握。汗。よ。跡。若。く。朝。を。拭。ひ。と。ま。う。と。ぬ。如。く。竟。か。と。笑。と。あ。き。此。日。の。暮。

かまひけりも一擧試んとて和殿を訪ひて行はるはど。吾脩素より大刀が好む。  
うそとされまし行牛て愧ふひとと辭み。許すと叮囑す勸解られても  
やう笑ひ公をよき譚ふ人と疑ひて苛く咎づふゆべからず。愧べきと云ふ吾脩のゆゑも  
ふくれぞハ隠さふう。去歳もとの才の病氣ふ世の便りと失ひ刺  
みりす。財布と竭してさてこの處へすむる故に路費とて多くもあらず衣裳  
医療ふ腰の物まへ活却とせずせむぞ。刃は代る竹毬。撲傷不懲く人ある  
身も傷をつひどらふ用ひかず。び笑ひます。とりふ素をま嘆息。我り  
亦故ありてえと旅寢をくるゆれが。路費をくすりねど四海をま兄弟  
きり。腰の物まへ活却とせずせむぞ。刃は代る竹毬。撲傷不懲く人ある  
とく。自他の差別はし物不自由ふをもとるゆべ。やぶられを遣ひます。といひて  
もぞのゆき。まよえみちよるき。漫ももと牛と人の刀と  
行纏す。粒銀三四顆拂り牛と紙を捨つてあは。漫ももと牛と人の刀と  
え一過失を貰ひぬ。うづく。とくや精て紅葉園へもどく推辞て受納う。  
素大まくこのとゆ。ゆくやくもらゆく又つまう。是お失れうふことながら。  
刀の謂もあらゆる。又その竹へ何の故。秘書せよと申すと云ふ。いづ  
紅葉園。うづく又え竹あり。をあをる縁故ゆ。刀へ口。今こそと。あく。  
腰は佩とも憑すかば。山路越する独行をひきとひなへ杖としつれ立す  
ある。とひな。その仇を禦ふん。あら集め。この巨竹の節を抜く。内も采を  
入す。うづ迄す。ゆる途を下す。宵く毎の木賃宿。采と風ふの角す。  
五六合づ謀り牛て放してゆき。これ云が方の打出の槌。一物や。三用を  
まじ。兼て竹されば。ひで。稅務せざるべ。と云ふは。そ。櫻の  
ゆき。推傾れば采もしくとも出れ出が。素をまへ足を云ふ。旅は熟。うづ  
公をよきと嘆賞。疑念永のゆく釋て。他のみを交り。有一日の。素  
湯ゆ入す。紅葉園が乳の下ふ。洲濱のとれ。病ゆ。とくと云ひま

疑ひ。その日傍よ入るを折。紅葉園と江湖上の物語も序ふ件の疾のてとば  
る。顔をつぶくうら瞻ゆり。和殿が乳名を測之助とえりとす。娘と同へ本其  
身を。さうかうま打目成。うれしいをりて。ふ乳名を。ちねむと。おへへくうる人を  
と。遊は小勝をそく。疑ひ。ひへびり。つが前妻の和殿の妹天目隼人ゆの  
女児。各が片塙と喚き。一のそ。基り又天目なと。共が京都の管領家。在  
る。ほりのうど。和殿が父よ遠と。比ハ。それも又幼弱と。對面を。すともう。  
和殿が親の古主仕し。つぶくらひしきぬまねぐ。内兄のとく片塙が事ま  
ひ。日未ちうし生。ひじ生く。泣く渠のとなく。二個の女児。唐草紅皿と名づ  
く。あおホが仕方。うなりて。今へもや十年と存。その故ハ。箇様と。管領  
高國滅との後。天目法印と公ゆ。親子四人。患苦して。南の果へ赴く。折  
仁田山の危難。妻子の離散。おもかく。説あく。かくて。つぶす。上  
ども片塙と。彼が女児のゆゑのと年を。行はま。忘れがま。て。まよ。漫ふ家を  
生上下する毛國より。越路の果まで。需。神社佛閣下。祈願を。み。消。毎  
名簿をとどめ。その数。千社と定。そよ。一万社。及べども。恙。にとも。有り  
とも。妻子がふみ。うすく。そう。ざりける。前妻の。舍。兄。よ。あふ。有場縁  
今。百。片塙。環。金。ね。こ。ち。ぞ。そ。る。こ。へ。神。仏。の。冥。助。と。受。べ。又。ゆ。も。あつ。も  
憑。く。故。く。こそ。り。と。あ。う。の。城。うち。羽。一。緯。委。細。ゆ。生。り。ど。も。有。繁。榮  
愧。で。や。里。見。ふ。仕。へ。迷。褐。氏。を。相。続。く。鐵。月。形。の。宝。刀。を。夫。ひ。所。領。を。没。收  
せ。れ。る。聊。り。物。ざ。く。ば。測。え。助。へ。妹。の。ゆ。ま。ご。と。ね。兩。個。の。姪。か。や。か。な  
え。か。や。も。う。う。涙。を。あ。く。や。拭。ひ。これ。総角の比。す。り。て。只。つ。う。な。友。ふ

の。そのうすれつ親の家ふすをあたひ。今へはま。皆是不孝の天罰と。  
えふすで才が恨むの。それより遙立す。妹夫婦が汚命へ過せつ。方  
悪業なうん想像がよと痛し。あくまでも先非を悔ひ親同胞もいた  
る。又實の房とらむる。和主ふあべ片堺や再會せ。小異ふばさふと  
まも間ふ在と後妻どのふづ妹。又令弱もつ姫と。やがて遙よ起りて  
彼天目法印へ吾脩よ冥の叔父まで。僕とがその數も六十を遙よ起りて  
急ぎと定め。只片堺とゆきの姫女と二人よ一人ハ頭矛の世よ生れ  
まふじや。今より和主ふ力を戴て。彼ホグ在所を索う。公つちよつせよと  
ひと真成ふ相譚ハ素大夫の感謝よ堪ど頻つふ鼻をうちかみ。かに詔  
素大夫ハ草津を夏を過て。とや魂を秋みぞりぬ。さうねる。  
路費竭うんとと体長旅。ゆくとく。測ニ助が房錢さんよ賄ふ。今ひく  
よりあゆふ。翼ふ。なまくこととく。と腰裡小盡す思へ。有一日  
洲ニ助よひ。旅はあると三年よ及べ。憂愛る。のこそまと鏡取ふ。され  
ゆき。とひそじ。されば例ニ助が志アホト。と應ふ。次の日草津を發足。と夏寒  
かりし山里を立む。わが秋うづら。又ふ残暑よ甚ざと朝よく走りて。宿を  
當り。夕へ遙く宿とうふ。ゆくとて武藏。國府隅と。ほとた日暮を。西  
没よけ。只官途が食りて。桶川を。と走る。行ふ。今宵ハ野干王の鳥夜  
うる。天え俄頃。小結蔭く。咫尺の間も黑白を。送よ途を迷ひ。と。

月夜の  
水

月夜の  
水



その名を呼ぶ。呼ぶても、里遠離る安通麻がゑの曠野を過れ、声も届く。  
 素太夫と洲之助は後れあり。とおひしらが追著してまじく走り。洲之助は  
 素太夫を俟とうと、そりへ度々立在ほどふりよく、邊れを間違よ隔りねかく。  
 又素太夫は其處ともあらね闇き夜よ、辛くて十町あまり走りつゝほど、洲之助は  
 徒々應をせざりしき。原末背後よりすくすくやあらんがくすそ先づらうと  
 ゆじ。あみ鈍きと咳きて、ひひひ立在折忽地赤子の啼声と怪しなき  
 かほ夜ふ野面よ誰う子を棄てん。めひうけどとむろごろ声をあえふ右まは  
 きより。いふ棄子ふみじむじむらと吾嬬村より再杖の里まぐ暮てゆくりの。  
 俱せてとどが松明をうそすとひくせと彼首に立是首よむ。ひくよさ  
 猪くらとひく正く女子の声う。素大まづく透れて、あらこまくせ  
 みどりて、そ鼻孔うだもあらね。鳥夜ふ赤子よう抱きく。事ねへがう  
 雄くらきよ。又捕川へ宿りそちが旅客うるが伴侶よ御見て迷ふう。と  
 ひべ女ハ啼兒を搖揚。原来れん家もありあをく。後見し人をねまく寂ひと  
 聽ひたとく。内逼ひてほだに、淨きせん間もじが段との子次抱きくとび  
 てん。とくを素太まゆく。そひと易たてとぞく。とあらえと撫りよう。  
 かをく赤子が抱とく。女ひひとも飲いげよ。がほさりあら幸あり。と  
 てく代りをひけり。且く甚歎ひと遠く。流水を棄て三反あります。走りまが  
 えく。とくは素太夫は小鹿の角の束れ間とおひしら。あらね赤子が抱き  
 されよ。や彼えみ瘠弱す患がとて今か十遍も百遍も漏れ果てばかな。  
 何處ゆれん。と腹辛くまか声す。交りて、ほがよその名をあまざれ。  
 とや嘲うの子の母口前と。あらく算どもゆります。あへ不審と疑ひ。一いだ  
 又おもろ抱る赤子が急地よ。おひままで重くきて。その冷えこと鐵の心。

これへひづると曾うち騒げど捨てゆくへ有敵本也。かくうづらふの三術さぶみき  
あらじよ近ちか九里入きりいりうぐ。蕉火高く照あかりて早桶はやとうづる棺ひつぎと昇のぼつ三さん種たね  
南みなみへ物縛ものづなく相あわせ潭だんうぐ。哀かなびもなく過すぎる道みちの辺へに在ある。素す木きを  
え。少すくなさすよせ。ある頃とき。のにへ石いしの地藏じぞうを抱いだき。まほまほめめうめうめ。眉毛まゆや撰さくれん  
といひづく咄どつと笑わらひうが。ちづかれてつぶ身みをうきが。赤子あかこすらあべば。そき彼  
いづれ石いし仏ぶつを。ひとすづびも抱いだき。浅あさすくも面おもてを。そがまそがまをすき。傷きず  
投捨なげき彼送葬かれうげ人ひとを。ほとぶあく。つがう人ひと件くだんの女めがみ。告おほめめが衆しゆ皆みな目めを注のぞ。さ  
ゆみゆみが狐狸けものの心こころを。うきうきとおひひかに。しおひ合あわせとはよもあねば。そき彼  
産婦さんふの化かわを。姑獲よしもとを。ぬるうにひがこの早桶はやとも。  
さうほきもの淳屠家かとやけを。縁故えんご因縁いんえん縁えんくされど明白はつきりぬもよ。かくは  
怪あやに夜よ虚ううと。あらそそ人ひとを傷いた危き。吾われ門もん再杖さいじょう。茶毘所ぢはしょ下くだり  
りの。あくと彼处かれへ下くだそぢ道みち。そぞら。紛まぎくもあらざれば。後あと一人ひとハ招むかす  
集会しゅうかい。これらとのてふ念ねんすびふ棺ひつぎと跟つまと。事ことすうひ孫まご今送おくりて中途ちゆか。六道ろくとう  
能化のうかの地じ荒井あらゐ。值偶ちぐと。は亡む者ひとから来世らいせいを。そん。まうはを捨すて。人ひと物もの体たいは。石塔せきとう  
代だいふりてゆく。といひづく棺ひつぎと杜もりか。而ひいてて彼石いし仏ぶつを綵とが來きせ。といひよすへて重荷おも  
なりぬ跋なまを。淳屠家かとやけを。浪なままか。ゆきえ。と。諸肩しょかん合あて。擡起たげせ。素す大天おほ  
他生ほかじやうの縁えんの金舟きんしゆは。びと借くわる黒纏くろまき地獄じごく。もくね亡む者ひとを。茶毘ぢは送おくりして。腰こしね寄よ  
用心おもひ。再杖さいじょう材ざいへ伴ともる。かくそ彼里人かれなしへ。間まめ。うき。葬室くわしつへ。早桶はやとと昇のぼれ。御坊ごぼう  
とうほくを。法師はつし。迎むかてこれを。受うけ。招むかす。茶碗ぢわん三さん四よ縁えんの缺くず。金きん  
乗のせ。茶ぢとも茶ぢを。といひづく。坐すわと。旨のとく。もて。飲のて。御坊ごぼう。茶碗ぢわんを。安やす  
指示しじ。こく送葬かれうげの人ひとを。あわづ。後あとと。伴とも。僕わらわと。腰こしね寄よ。御坊ごぼうを。つり。ゆすれ物ものを。ひき。正ただく。そり。又またも。あくび。ひと痛いたきよ。ねて。京きょうを。ま。

アツレ あま うつれ あま  
ウ。彼伴侣が至て是ども今宵ハコト分明にしもと。緯の序よこの昔ハ同宿  
進ふる。これの故ハ如此と。姑獲鳥の怪談を辞せしく物なり。翌ニ  
止めて所よそふ三人又一人又來べ。ちと熱念添ひ者よりばく燒身マキ  
置く。散動うゞく石仏を門の柱より倚り。素大夫ふ別を告ね續きをて及  
け。御坊へ素大夫、緯の趣等より町喧ふ慰め。もと入へりて誰うへと  
只管入られと素大夫へやかく後見し人の心ハシマリからへ事一ツも。被初  
戸のほり立て。あと過る人りやゆると俟て。小判之助ハ茶毬の老りを透す  
足でなづり。送る足と透る足と透る足と透る足と。唐縞うぐい。兄公候と聞ふ同様  
遠く折戸の向ふ走り。さとまく。迷ひ見る。和主は正く背後うり。すと  
ありひかりをもぞく。在甚矣又兄公ふ後れると急ぐ直と走つて。いとしく。  
人をもえども勞へ。拂えと草薙の縁頬ハラカと。素大夫も姑獲の  
又茶毬送りの里人木よ伴ひて。緯の趣委細ハシマリあざれ。小判之助はそ眉が  
輦スル。それも又車スル途こそ。奇ハシマリとわと。獲て。あまり十町どうりある。北より  
南へ下ほぼそ。一園の光物ハシマリ。後より因たずして袂の下ハシマリと。脱ゆく。と世より  
金精ハシマリ。とひよされば。まつもるまつと扇を揚げ。搔撫ハシマリ。それが果てて  
物や。こゑあくらかに貸を獲る。とひとり笑へて。手拭ハシマリへ。彼金精と推畧と。袖を  
抱きて。ひそひそ。まつもるまつと扇を揚げ。搔撫ハシマリ。といふと。すと。金精ハシマリ  
打落せ。りのよ疑ひゆ。眞の金ふあふ。まつ。如今眼前お被ハシマリ。と。金精ハシマリ  
錢よ。されば。まつもるまつと扇を揚げ。搔撫ハシマリ。といふと。すと。金精ハシマリ  
ありて蚊遣ハシマリ。御坊へあらわして。指燭ハシマリして。牛。三人齊ハシマリ。こよどり。ゆふ  
彼手拭ハシマリ。包み。物。緯の断脣ハシマリ。は。手拭ハシマリ。と。又齎する。雪花菜ハシマリ。と。鼻ハシマリ  
と。うぶらあふ。云。什麼ハシマリ。と呆れまどじ。ものく鼻を掩ふ。と。其特を

とて野糞を抓て渴むて尿襟ふ飯山後悔これと異うてひう腹のら  
糞之助の人を恨むすもく頻々嗟嘆志しう御坊を义父と爲て釋く  
小脇を鼓各位仰とうえま。必ず金精といふのうぶんや。それ足人魄す。  
人の命の終ると三魂ハ天より歸り六魄ハ地より歸る魄ハ一氣の鍾のありの天より  
形を魄へ動作痛癢のうり地脈の數のそめ述めり人骨より外と  
あると死體を脱て夜光を發須臾中天より飛行するを俗よ人魄と喚做ども。  
魂のあくば魄のあくば。昔本山の說法の一善知識へ覗のきしき。志のゆく人の  
鬼のあくば。彼人魄を打落せば死人永劫中有よ迷ひ。やべた更返りゆふ。その  
悟のく。彼人魄を打落せば死人永劫中有よ迷ひ。やべた更返りゆふ。その  
人のよもよも。こよふよも打落して人魄を叮嚀のよ死のく。四十九日の追薦のせんだ  
經真寔の施行せられ。その人件の祟のよりて頤死のあこと七日のとまだ。  
子孫のも繁昌のとること。かくととのに命危のい。慈悲のなれ下行のまひを  
真顔のうりて説諭のせが糞之助のあを乞のまひ。崇のよし説のぎうりてあを參のまま  
とて是のは世よ學のよ。證據のうして信のごに。と詰のと御の切眼のと睂のりよ。而の是の人生  
靈のの崇の不命のと墮のそり。今のも昔のもあんとくへ譬のへ。今の宵煙のとのと此早捕  
うふ亡者の如の。これよ亦一條の奇談のゆ。疑のふゞのめり。と國庵の閨のへやの近のれ。  
吾嬬村うす莊客の桝二郎平のが後妻の根坂のとのはに醜婦のくじふの頑蠶のを。  
妬のむと酷のく。常の夫の罵虐のと桝二郎平のが好のも又のもきのる男うれぶのが  
まのふ角口のせど。只理を推のて彼のを窓の。前妻の羽生のおとおしのを人のつのもよのまのの  
る世帶ののわたりしり。彼のおとひ此のをとのせよきに妻ののまのうのいのりせも  
音脩のを裏のひのひ。あの妬のや腹のよし。と声の限のよ罵のり。狂のい。とひそてらのいをど  
墨のと後妻の眼のと睂のし。齒の切り。がのものく。前妻のとのう共のよ死のざのく。とのうとの  
絶のて聽のと兩の三日狂のい。遂の不病の脉のを取のね。此のと後妻の根坂のが腹の。九个月の

する子さんゆゑびとす。とひひるる。とまも有繁事後悔。と。看病等兩  
うふは折前妻羽生が墓のほとり。おとく。寃鬼坐と。一村を。風声せど。  
杼二郎平へころみを。おほやて。日未根坂を練みて。前妻羽生をさる。  
とすうちもおひくが彼が墓よ妖怪か。かく根坂を闇と。夜發ひ。眞の  
冤鬼さん只虚よ衆て障早す。ひと孤狸の所るか。そ。せんまへり。と入  
え告ご。こうとくよおひ決りて。竊よ斧を引提つ。初更の鐘の鳴こうふ件の  
墓所へ詰まぬ。固よう田舎のむづれが。父母先美の墓とも。家去り。とくがふ  
そ。豇豆畠のめ。アホあり。うる行ふ杼二郎平へ。前妻羽生が墓の背榛樹の葉ふ  
駆れ。彼冤鬼の頭を。今テ。と俟つ。かくて夜へ二更の比と。あけたる。  
あらと。ちば野とも。かく。變り乱せ。女の姿忽ちと頭れて。羽生が墓責  
敵た。仰ゆきうごと罵る声へ定ふ。と。杼二郎平へ。好み好景と。牢を  
窓近づ。され畜生甲夜より候。一も。うざや。と罵り。うが。斧を揚。洮縣をく  
妖怪の頭を破。と。苦と。一声叫び。金形へ消て。すうす。さよと。そねひ。す  
騒が。と。手え延く。一聲。小打殺。一。ざれども。野狐うぶいと。鬱く。再びと。さくへ  
おも著。と。かとうごと。て斧を突立。瞻く宿所へ。ゆりつ。病牀と。記ふ。や  
かく後妻根坂へ眉間より髪の中まで。砍ぼ。と。癌よなり。たれ。腹つた  
牛を仰さ。と。仰さ。と。仰さ。と。死。あく。ふ怪。と。れ。杼二郎平へ駭き。まどして。鄰人を呼  
起し。こり。おと。お抱。と。湯あ。と。口へ。活き入れ。と。既。お縛。断。と。と。ハ。校ふ。がくも  
あ。と。杼二郎平と。つ。が。斧。よ。妻の命を。あ。め。と。と。い。よ。な。と。件の。赴き。隠す。  
これ。と。わ。ぐ。と。前妻羽生が墓のほとり。夜を。お。寃鬼。孤狸の。行。ゆ。と。  
おひく。と。が。恨。と。實。と。推。が。奴。か。と。後妻根坂の。生。夷。と。前妻の。墓。と。歸。れ。始  
憎。の。恨。の。を。と。罵。り。と。あ。と。不。思。議。う。され。と。ゆ。と。斧。と。頭。と。身。

This fork is very curious.



怨冥の形滅と家よ死る。根坂が眉間に痕残り。忽地命を隠せ。世  
稀うるふかん根坂へ素より頑固よ堅る婦となりつも。某日未よりう。ル  
セー前妻を喰ふ渠へ偏か朽すと。瞑想のわしき病煩ひ悪化す。  
脱生て羽生が墓所に頭れん。ちよが腹より遠くに分娩べりありのま  
ふ悲みるふりそなり。といひて鼻をうちうそふ。裏皆ぬくびうち敬驚き。よみ  
前妻の死冥が憑て後妻を悩む。ぬ治へまくひと後妻の生冥が前妻の墓を  
責へ。現未曾有の怪談う。かほ珍叟のいざも過世の業因す。ぐれ  
只見人の追善こそ。肝要う。と悚く。杯二郎平の歎きふる事。その夜  
跃騒き勇捨と法師えりしと。蓋て茶毘の送りせと甲夜棺を昇  
りて坐つる。彼等との鄰人或へその友ぢらも。さる行ふ件の怪談。次の日へ  
不や語つば。あらまじもあらまじもの。あはよお兩箇の客人一個へ姑獲  
ちよか撞見又一個へ悶く。人魄を打震せ。との夜この金まるあく集会すとも  
甚奇異也。これにて推量ふ姑獲も人魄少作のえりよ疑ひは  
その亡骸をあらめり。かぞり正した證据へじ。せめて翌一日へ此とどうふ  
齒りて。この人魄を厚く葬り。祟を脱とすひ祐と真成よ勸むべ。素大夫  
耳を側て菴主の教誡説ひては。路費五くねれど故郷へす近づぬ。  
りうぢくの施物が生きて。その祟を脱るべと問せもゆき。助之助と  
素大夫が被そり。嗚呼うるふ謀とあらむ怪談にて人を惑ふ。祟を説く  
施物と貪ふ。彼が世計生活する。實言とて可惜。路費を失ふ。愚  
うり。實ゆゆめや。それを物語す。うがしくてあて候と深し。宿淺え。一晩よおふ  
せん賣傍が底意かららひす。暇へは。亥中の月をや生く。ふ誘ふ。と  
ひきう。御坊へ勅願とて。みよとどが口のこまよ。人を救ふ。弥陀の  
引く。御坊へ勅願とて。みよとどが口のこまよ。人を救ふ。弥陀の

本願慈善へ出家の面目されど誠心をりて説谕をよひがまうる。推  
くふをとて施物を貪る賣僧もんを佛無法の愚物とす。七日をまくと狂死  
せん死灰と等して汝と對して理非を論せんへ無益なり。後悔をもと罵とぞ  
洲之助の怒ととりおまゆり声をあり發し。ほざくもあせ入道。七日がとうと  
死ねるといふ。つゝこの巻をと喫へて汝と冥土の郷導すとこそん其處を退そ。  
罵狂ひて竹縄へ跳上する素大夫へ後より遠く抱も組つばびまつ幸ど。  
外向へ引ひて生きて不實をも諭して桶川へ赴たけ。門の戸渡て臥くとし。  
客店を敲き起して墓うき其處を明めり。

## 第八

夢と占とて仇を警

烈女鮮衣が嗟嘆の霧海

詰里洲之助へ起て素大夫と嘆じをとふ果敢くもくらへ应もひせど。  
かく嘆きて歎を擡。某昨夕臥てより胸痛て寝ずれど今夜も甚。  
ム持さう。かくして勉く起ゆるとも路をゆぐれ氣力の乏しあらう。せうと。  
笑顔とくちと極ども寐ともなうて目睡一夢夢の中にさの間見る妻と女児  
楓を正くとす。彼本より病體と三年弱りまでかくす。吾脩と張体  
むりうちうりた足のミクシカ且ども。夫の病著をいわせん。頑丈へ兄公某は先  
がちて生の間よ卦に逢くとも妻の比素大まかかくと妻鮮衣は告てて。  
夫はそりて病頗る。女房すどもに良病。これすとんりゆじ。胸痛  
持病うまい。相手へ名もとまづう。ひつ小苗アモ。エヒトアヨリ片响も  
をと。彼处へ音耗をテークがひづく。故くとそひつを。といひゆへと音を  
相もせば洲之助これよメ黒毛とくちひだり。和主が俄ほ胸の痛者承  
うる妻子を夢みんづも。昨々賣僧が怪談。怡神の魔。かはひの  
患ひよう病となり。夢とんなり。あうとも彼处へ音耗せよ。あうとも

推辞らせど。との桶川より半間の里す。いはく坂東道。六町九十里不足す。  
さればけふの呑氣を起とも。翌の亭午か彼處へ到る。そばそまかて保養し。  
まゝあやゆると行囊を搔拂り。湯を乞は。丸薬を飲し。よじて町寧ま勤め。  
素大夫へ詔しけ。病を忍び。黒牛斗とう坐て。ひづら。洲之助が素性ふと大  
紹攻なれ。妻鮮衣を返す。唐高素二郎と云ひて。ちづら。おのれのもの。あ  
きく。どつぶ家真間の里なる。弘法寺のほうにあり。東面今は衝門の  
右手のこゑ稍高き槐のれんを向とも。索まく。とんあく。しづくと  
いそがせ。洲之助はとうぬ果て。彼一通を受う。袱包を脊へ投掛端折結す。  
かひぐしく左手小菅笠をうて。右手か巨竹の扇引。程で素大夫より別を  
告宿のゆべに。彼人の音病を憂うとて。纏と馳せ。走まく。  
かくて天目洲之助。桶川の驛を出ると。すこして。すの運び。じしつ。町屋村の  
あさかる。曠野をむだり。過る程ふひと怪げ。旅客二人端うくと立て  
行あひ。彼か豫て洲之助と相識し。うのからん。こわくと走近え。  
三人。ねの樹蔭ふ集合。ゆるやすん。要密語。輒然と笑ひ。して彼  
兩個の旅客。ひらう途を引く。洲之助が後ふ。跟た先ふ立つ。りゆせゆ  
東のくえ。起く折瘻負猪もやあん。うんそろ。大き擴み等。く脇の如れ  
身を下し。封より脱き髪冠を逆さ。蹄を鳴かし。鼻嵐を吹く。木根石被  
まどひ。喙ひな。喙狂ひ。走り。两个の旅客これが。と吐嗟と。だら。城馬に  
まどひ。一個へゆり。よほ松枝。辛じて脱登す。一個へ。とれと左へ避て。二三町  
走る。野猪の彼本と。もくよび。葛直。喙り。と。洲之助と。まどひ。と  
まどひ。ちと。まどひ。まどひ。ちと。まどひ。まどひ。まどひ。まどひ。まどひ。ま  
洲之助へ。些も騒が。結ぐ。坐の納引。割離て。搔投捨。肉と。達彼長角と

音ふして雄馬へ繞り雌馬へ走じ。まことに遣錯して西三遍疲。足を踏りく礎と蹴る。その音竹を破る。野猪ハ肋うち折りて。脛と倒立を起も。うそ衆一掛く。元々楚と跡蹠とが血を吐くこと夥しく。四足を揚ぐ死んで。これを廻らす旅客亦ハ毛骨竦く舌をふくし。彼雄畧の光時よ葛城山の湖特の野猪もかくやあらんと賞嘆しき。妙なるゆゑを下り立處までもかくすむ。或ハ呆れ或ハ歎ひ。今にとづめな大哥の本事。牛を殺した暴豬と尺一足を蹴殺する。新田四郎忠常なるとも。ひうぐちこれよ及ばず。吾們より大哥よ遭ふ。野猪の牙は掛くれて。命をとる野の牛と消えん。嗚呼危たる危うり。といひて汗をかく。拭へ。測之助蒙金とうらぎ。芳く。これどう上日めをりて汝かく。後へかく本事を顯す。と。猪の巣期花狸の陽滅叶ぬとののかく。藝。まことに是よ一生怨命。已とて。ひうぐちく。かく。人ふ生る。かく。兩人へうし点て。大哥のまを謀害して。李子。野猪もとのまよ。售うが錢より。被ふ。せん。肩勞の小利。大損うち捨て。遊。野。而て絆く。と。誘ひ。安雞尾のうへ走せ。不題。下總の真間の莊。素大夫が妻鮮衣行状正へ。家を守りて。女兒楓と養育。毎日よ早よ。素。夫。え。縫刺のる。と。誨。絲竹の調。大さな。と。做を。楓ハ年只左右の指。ふ。さ。一ノ足。と。ね。稚。こう。の幼弱。すく。ふいと。怜。憐。一ト。と。び。教。くる。と。ふ。日。ご。う。絆れ。かく。も。絆く。忘。せ。素。う。り。奉。を。涉。う。と。移。七。の。年。か。別。き。る。父。の。往。方。を。朝。夕。か。問。ぬ。日。も。なく。日。を。送。ふ。そ。の。徒。然。を。慰。る。言。多。ふ。敵。へ。渡。る。の。渠。が。父。丁。七。ハ。も。ま。の。老。冥。う。下。司。ふ。稀。なる。義。士。な。れ。が。寒。家。よ。住。て。不。足。を。思。ふ。ぞ。女。ゆ。と。悔。う。ら。も。揃。ひ。主。従。親。子。が。返。ふ。ね。人。と。果。一。ら。く。ま。く。不。操。あ。う。う。う。袖。の。じ。ト。兩。り。れ。宿。へ。荒。う。ま。く。ふ。廣。く。れ。ど。う。世。へ。狹。く。散。な。く。鬱。悒。

うつ生の間の井ふ。朝まく星す。深雲のそりある山と。なまくふかの塵  
積りて。埋もて。暗く虫の声。今茲も秋ふなりやうり。かくて甚ぬ三月の昔日  
ゆすり。一日鮮衣が生平よりもと起られど。珠玉物をわざわげ。頻ふ嘆息  
あらしが。丁七八日アと。例の痘や發りまひ。血暈あら歎泣も。ほんに在す。  
脊捨て進みせよ。といふを鮮衣推禁。あらぐ愈れが。と。うとうく頬かへむを  
生平からも。うち捨ても。死ぬにし。吾脩が今朝の病著を。積ま。ど。痘やも  
けふ。頃日へ打つた。寝寐苦へん。曉の夢まえゆかるやゑ。譬へ昨夜も  
所天ハ枕上ふ立ちまひく。これ如些とくのゆきあり。上野うる草津坐て。洲之助と  
いふ旅客と。岡基基の勝負を争ひて。渠が又よ命を隕。三年以来千磨百折  
旅よう旅ふ月日。送する。その甲斐なくして枉死せし。遺恨のはなし。三熱の  
冥土の苦難。涙ぐましく。永劫。徳。送り。せ。遣莫相立へ。うづく。汝達。みと  
藉く怨を復さんと。うづく。よりて。まご。魂這奴が身小縮り。との處へ誘うて。  
翌亭牛乳と草津うり。すすりのあひて。洲之助と名告へ。正しくうづく。黙言も。  
よくすこと諦め。あらじて。物をどうぞ。静す果し。アが怨魂を慰め。うづく。千部の  
読經百日の法筵。ゆまく。仏果がほん仇人の齡へ三十あまり。その面影を  
箇様。と委細。告め。わら恨め。うづく。と。叫ひ狂ひ。搔抜く胸より  
鮮血漬り。おひ只朱ゆ染り。うづく。忽然地変え。汗ふ衣を絞り。う  
うち騒ぐ。曾と銛ちても。やく文よ安らぐ。との故よと。を。見え。怨ふ同  
慰る。和殿よかく。と。やうも。ゆうふ夢の正。び。うふ。ぬまなく白と  
え。と。告る。を。丁七八日も。はる果を。某も亦。ころ。曉よ夢に。御主人が見え。あり。  
緯の起今奥。この告り。心と。一急。うづく。不思議。といふも。やま。り。う  
五臓の房れ。う。發る。うらうまれ。年來。日あら主従が。おひ忘く。はしも。見。

心氣勞れかくまでふ。怪しき夢をアトの歎。又正夢といふとあまぶ。そぞら  
やうねう。とぞうりふ。主役一ぼよ嘆息。額を病し。手と又たゞひ入る眼底。  
たりらがとくへ涙す。且て鮮衣へ目を拭ひて泣を舉。吾儕が夢も。そぞらの  
夢も。暗ニ行節を合せ。と笑ていはせ疑ふ。所天の神灵の告うべ。かくで  
けひともあくぞあくん歎きの中れまく。とくらぐども痛す。や二年以未  
旅宿にて。索あきれど月形の宝刀の往方を。雲のゆそ閉する。尋常の風  
病く家を。身すくみ。あすそ公の及んで。誠交葉餌を困う。そぞら  
冊たけくんふ。うなうりあひ。その日を。らともあくぞけふまく。やくらほ  
送り月と日へ。あ。を照す。世に。勅す。存命。そぞく。その歎を。我れ  
やえ。年來の志を。終遂。あ只假塗の碁の勝負。搜つ夾もう綽けて。わくわ  
済を。砍くれて。後手よからず。体死石の。恥。死。劫も。く。アト世を。發と  
舊里へ。くる。あ。きた斧の柄の打。か。りけん夫の。是。命。そのまく魂の幻ふ  
告う。りせが既よ。ある仇人の面貌。その名ハ。助。す。や。も弱。音。脩す  
とも。武士の妻。あ。心。を。鉄石。り。う。で。う。誓。と。誓。さ。う。き。準備。を。も。や。せ。よ。と  
節義。や勇。も。哀。く。傷。ら。ね。烈。女。ハ。白。真。弓。張。む。矢。的。魂。モ。丁。七。や。く  
感嘆。も。憤。行。さ。る。と。う。が。ら。と。毎。く。心。過。失。め。く。夢。の。虚。実。ハ。洲。之。助。が  
く。あ。と。す。ま。さ。う。ふ。決。て。ん。け。の。一。日。が。一。期。の。吉。凶。只。甚。に。任。用。一。心。長。固。く。俟  
ま。と。ひ。く。障。子。推。ひ。く。日。新。遙。よ。う。仰。ぐ。庭。よ。楓。ハ。渡。む。と。雞。よ。餌。す  
與。て。さ。り。常。く。異。う。る。母。親。の。声。ま。む。知。る。が。く。と。や。縁。頬。す。り。遣。り。す。く  
母。う。ふ。う。も。又。心。お。ゆ。一。や。ま。や。ー。と。同。つ。貞。を。さ。ー。説。け。ば。鮮。衣。と。れ  
え。く。と。今。丁。七。と。相。潭。る。緯。の。趨。白。地。よ。あ。ふ。せ。ぞ。と。お。ー。が。虚。实。も。い。ま。ご  
定。う。う。う。ね。夢。物。語。を。稚。た。り。の。ふ。説。あ。じ。て。懃。み。お。と。お。せ。ん。ハ。便。す。れ。不。る。

りよく正義うふんま。ひなじゅ要事時遠離だ。とらひうてうら微矣。今朝  
とも唐へ發りふけり。温石煖く。とやもこすりぬ。波ももとくらがよけぐ。  
賓客のまきふ足を徇する。波連がちふ車く。便宜はく。と。手兒各の  
社へおとゆきて日の没こうてねせよ。嘯楓呂の割れ。おほゆかよまれ。好すれ  
の調子して。よろん比々進ふ。じよるやへあい。と。賺されても。恋とあのみ  
がもさと丁七八解衣が氣をみ。惜して。やよ渡る。まのふの雨ふ弘法寺の山中  
菌が生えうる。けつへ許させうとよ。娘と俱一糸くせく。日ぐとし桜が餘が  
みよらひづけうる。敷入すくと。とくら縁。とらしきとす。根がさくと渡る。  
生ふ一迹よ夏あんと。あくねう寛是よ佛の場の草。待せんと。鏡ね。龍門桜と  
庭門よ。ひと樂げふぞ走り去。子どもらうじう。みち。あり。めぐれ。主役の命運  
竭く仇人のあふ。一聲きよがことごと。親子一世の辞別。とくらひは。面り。

うちやめびざん玉画。ゆく親うぐ世をまよ。誰とまとうか人とううぐ。痛ま  
やふ。とくらがえふ。ひうで岩根の葛りみだ。紅涙禁難れども。送ゆ愧て。ひうり泣く。  
稚れりのひ遠離つ。とくらゆくと。鮮衣を遠く。身を起し。母の像見ひ身を護る。  
懷刀と。生と。劍先段子の表囊も。仇人の破軍の名。陸自性と祝して。ゆくと。身を  
ひまむ。ひまむ。ひまむ。引著一振貯。參む薙刀を。長押よう。塵うち拂ひ。搔拭し。鞘推甘カゲ  
きどと。身經ふ。丁七八窓のほくと。人砥座の桶を。居て刀の寝刃合を。秋の  
ひや。日朝のひや。園。正午晨告。雞の声。すが下さく。暑者から。浩處み。刎之助。ひね  
よひく。迷櫓。門の槐をうち向て。うちまく。とほ門ゆ。諸折戸よりきこふ。い。  
楚かく。丁七八窓の隙より。まく。翌。漆器やゆく。と。鮮衣。日代注。け出  
迎まず。刎之助。引捉。は彼竹の長角。縁歎。と倚り。丁七と。身を。うしや  
を。あい。あい。あい。身。其の桶川より。うちゆく。の使。す。あい。刎之助。と。うすの。まく。身

りう共ふへりまべうし。すまへ某を遣せ。縁故の後よこそすまひ。彼入  
そとあより。唐縞素二郎と名告され。かのまゆる人来く同人。まゆ經  
あくばといふ。あれども。門の槐を目的。紗坊。紗うもあくばすよ。豫て  
示され。すまがどりひく。汎を推拭。人狎易た。校兒のりふ。へやご定  
なぐれ。丁七八歳。父の。かくまでも。今又。公頃ふを。それども。氣き。由  
頭。寔は。寔は。唐縞素二郎。と。つが主人の舊名う。内室へ。彼處ふ。と。緯  
画り。小丈え。且あくま入。と。誘ひ。側之助。草鞋の。細解捨。手荷り。  
裳の。埃うち拂ひ。ゆる。と。長角を。引提く。進ひ。客房の。左。その廉まり  
爲。良人の。讐敵脱。と。声も。説く。鮮衣が。かく。薙刀眼。まく。因。く。体  
刃の光。ふ。側之助。吐嗟と。ぞろ。身を沈して。これと避。と。何。くる。と。うせむ墨。  
右。まのき。より。丁七。が。至。う。と。聲。大刀風の。烈。一。左。右。と。御。ふ。と。後。あ  
と。床刀。竹。瓦。只一打。よ。鍔え。より。砍底。されても。ね。とも。せ。ぞ。今。する。鞆を。そ  
ま。ふ。丁と。打。る。眼。礫。ふ。丁七。阿と。叫。ゆ。ぞ。鍔。か額。と。傷。られて。怯。ひ。と。ひ。う。  
と。側。之。助。ハ。様。臂。を。伸。して。搔。孤。ミ。矢。赤。を。う。け。て。投。く。が。足。そ。く。が。ぬ。不。筋。手。り。そ  
手。抜。く。傍。の。壁。の。中。へ。半。身。撞。と。投。へ。る。鮮。衣。これ。と。す。も。か。く。だ。う。不。見。手  
薙。刀。を。首。衝。ま。く。受。と。ぶ。を。こ。く。理。不。盡。う。り。何。ホ。の。故。ふ。吾。と。仇。に。殺。し  
と。も。る。や。奴。隸。ふ。微。少。ご。物。ふ。狂。り。女。レ。と。そ。の。じ。ご。に。可。惜。余。と。失。ふ。る。と。声  
う。ち。て。罵。と。ぶ。鮮。衣。の。息。吻。ゆ。と。日。尾。と。揚。齒。を。切。り。く。の。期。を。夕。び。く  
う。や。陳。ぐ。や。そ。良。人。ハ。草。津。り。て。岡。基。哥。の。勝。負。を。争。ひ。る。決。う。め。は。奪。ひ。  
す。良。人の。冤。魂。夢。か。告。汝。を。ら。人。誘。り。と。モ。と。正。手。を。示。現。よ。寝。刃。合。し。  
今。朝。より。ね。と。あ。く。さ。ね。や。怨。の。刃。も。受。よ。と。敦。園。す。ぐ。引。く。難。か。少  
向。脛。薙。ん。と。閃。せ。ば。跳。わ。づ。て。受。う。と。角。ひ。き。く。手。裂。と。割。て。肉。う。り。す。

一口の刀と鮮衣信とて、第用ふ刃をかくと、痺者害ひゆく顕矣。首を  
遁せ。と又聲かく、刃尖を踏ふらば。これ不淨が良人を殺さざり。かうと  
まごや。と半しきど後より。丁七ひよと起し。而て声とうひう。丁と呼む刃の下を  
彼此と潛脱て拔あり。せ鍔を削る奮撃。突戦心烈忠義の主従。巴よ逸り。  
洲濱ふ並び。一上一下と。また盡せども。仇人へ剛勇ひよ倍して。入さん  
ともる鮮衣が難刃の鞘と切爲。かくと刀よ丁七。肩が破と砍倒其。鮮衣  
遠く短刀を引抜て。突懸れども。卷き。勞倦て既不危く。とす。折駿。隠  
と。床一采の旗雲。庭うる槐かく。下に降りて窓うると。やへ。ちの長丈  
餘の金剛神。忽然と立頭れ。勝満する。洲之助が歴を破と彈て。脳も碎る  
じく。岩そ。魂滅ひうり。叫びつ。やええりて。うち駿と砍拂ふ。とすれども。力衰  
腕癱て。合ひうる刃の毛あらだ。黒入りうや。と。呆まつどひて。外へとどねが。鮮衣の  
透間も。多く。穿うる。锐刀尖よ辟易して。遂ふ刀をうち。落され乳の下うり  
脊まで。鞆も敵且。と。ごまと刺す。そ。叫び苦く。と。漬る血へ。彼此へ。うりはだ。倒す  
くる。丁七が顔へ。夙とかく。し。が。丁七の息。かえ。そ。岸。破と起つ。洲之助。足を  
拂ふ。そ。誓倒。押て頭をかく。と。金剛神の形。消て。只。屋の棟。こ。事。げう。  
室うるで。かく。仇人を。聲。あら。と。良人の靈魂。ちう。と。戮。こ。よし  
ん。梢ふう。と。櫛雲の窓。うり。アヒ。ぞ。不思議な。れ。丁七の瘦。ひく。も。よ。と  
勦て。向。バ。莞尔と笑。み。ひ。ふ。う。よ。う。と。う。僅。ふ。一个。处。幸。か。て。浅。瘦。う。某。ひ  
當所の長へ。復讐の。よ。と。近。金。蒼。些。愈。と。俟。て。以。主人の誓。と。あ。ひ。  
彼地へ。ひよ。と。骨。拾。ま。ぎ。の。灵。と。あ。り。と。回。蒼。と。毎。く。首。及。の。鮮。皿。と。

うに武人としてある。死體を運ぶ懷より、ゆづりぬて本書翰あり。彼を  
何ぞと號ひ鮮衣これをうち揚て。宗徳が眞間の宿所へ音妹子みづくす。  
と写して表書が正しくて、書の手迹あり。故こそあくわくせし。封拆間も脣  
躍りて、繞ひ側うす丁七も膝立ちよせそぞ。御元原未主人の筆とある。  
路費手取ふせんをぐる。其差うる桶川までゆり来る。その夜うり公持於  
あきか追單。あづこのふとあくせんとぞ遣される使となり。うえでひよ。  
と向ひ鮮衣書流とどめ。やひまやとの洲之助は、良人の前妻。に焼ぶと  
さんか兄天目氏の子すみんとぞ。これ又よじとて、まふ遍と書簡をあむくす  
か。かとびこの人は主人ふ。環會へ四月の比し。ふゆり車を家不届きて。ふま  
かく歎待せよ。ひと叶嘆す。書寫あひて告来。まひ王梓の使をり。いふと  
墓父た養をゆめてお同もをわど殺れ。今将夢後をうぶ。をすくよと  
主従を後悔。慚愧すをうく。もみ。感ふうべれ。或ひは文ふ釋ざりけり。

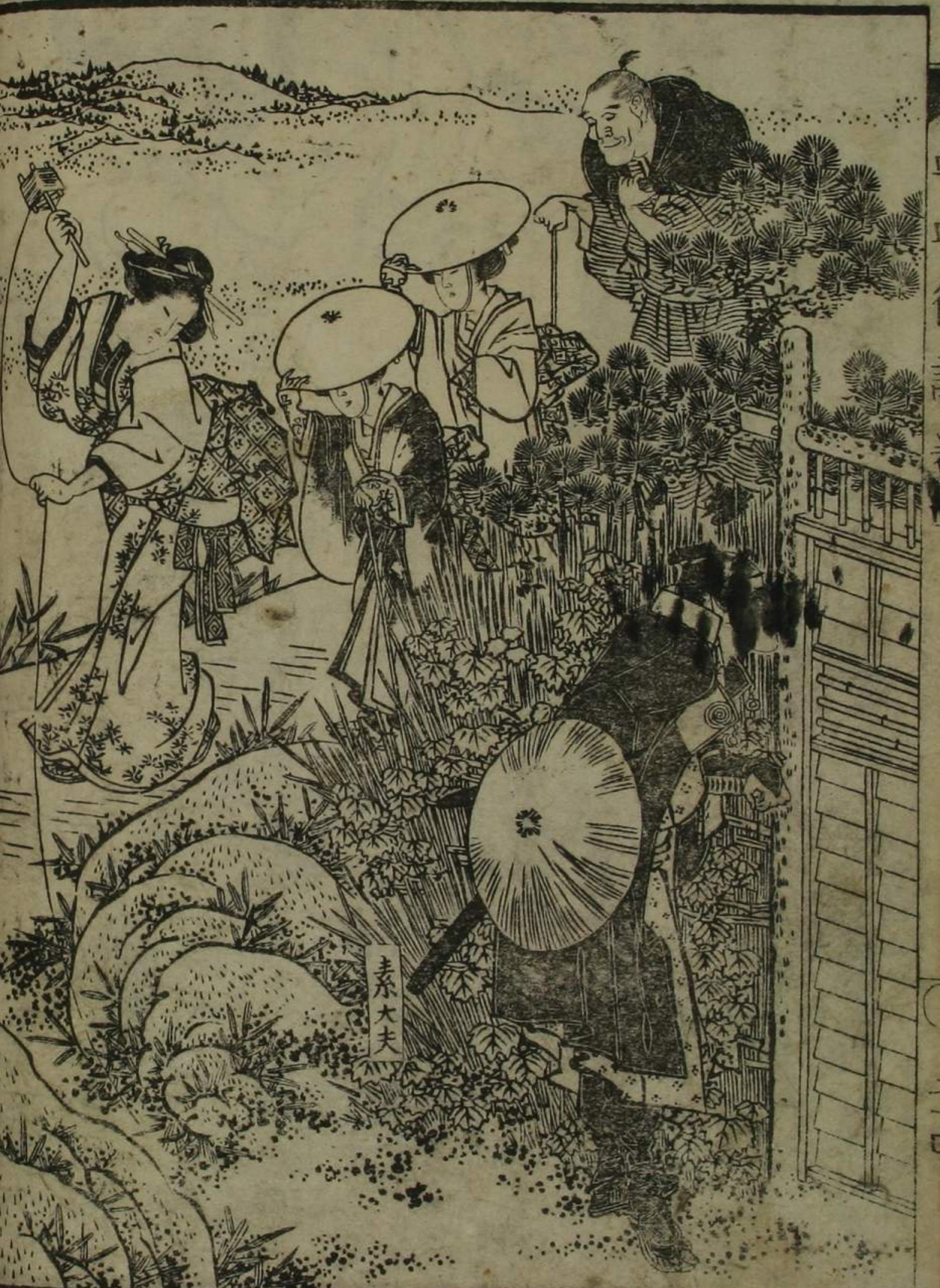
## 第九

崇宗ふるて妻を喪ふ

萬春良雄が帰郷の後悔

洁處ふ外向よう。遽くすきりのゆ。誰やと。國が素大夫人妻ひまじと丁七。  
とすきじと待つじる。やうべあくよ恙う。ぐりまふる。欲まへ比ん。みりの  
なきども。その機もなく洲之助を殺せ。ふ只、愧ひて出迎。絶が素大夫人。  
鮮衣やむ。これ又よ。楓ひきよどや。丁七と。ゆびて登る縁起う。とふね  
三悲や。客房の簾ひ離。壁毀。芭毬休する洲之助。身首所を異  
乎。鮮血。席を浸す。こハ何。みそと。叫ゆ。駿まどひて。走遠。勝く  
壁の毀。蟲の如く跳へ。畏り。ま。鮮衣と。丁七と。もくかうて。懲  
ほど声を激し。つかひよ。とあく。汝達へ生も迎。ひま。まく  
かく。りしふ桶川の旅宿。書齋にて遣。ま。洲之助を殺せ。といふ





素大夫

りんごころひど。富座より論あり。も。こゝ前妻の兄とあはば。娘も忍びて  
 あがむ。もう極く殺せ。欲女ふかげうた虎狼の行状。これ佐一丁セ。  
 人画獸心論。及。まきのふとの洲え助。桶川を護。後。行もあく。病著。  
 高見丁ごとく愈。直。彼處を發足。途のゆく。神社へ名簿を  
 とどめて順拜祈念。あへ千社と定。三年のけふ及びくる。  
 一万社。え。それひこう。月形の宝刀の往方をあんぬ。又。女房  
 女見が。異安全を祈る。墓。結ぶ旅宿の愛。あうよかれに付。も  
 りしも。毎。かくる。日。告よ。と。人を遣せ。家へ阿修羅の衢。とかれ。  
 過世づる。業報。事情を推量。鮮夜。密通。あく。ふ  
 ざく。ん。ど。の。洲之助。ふく。れ。故小殺せ。欲。あ。じ。ハ三年。おる  
 まで。件の宝刀を索。路費竭。阿容。と。ゆる。支派。う。く。ど。ひ。づ。

乃より假初より。因爲めのれこの人を殺してとまは罪を負す。自滅させ全  
謀りし候かへるまな公を推へ根うどくみまねも不審。丁七と相縛く宿  
を女よや售とひけん縛委細よ訴うぶ立地木のくと人畜とは死奴原され  
どもされも意母まじゆね。それへ日薦のキとこめ。花もは咲むぞ寒もつづ。  
只立枯ゆぐべんのと侮る妻の鬼百合ふ馴き奴隸があうう毒草。これ  
罪せんとせざれども深瘞を負へて天罰し。縦今汝本を推うぐて西段よもと  
うも恥う争ふとのとみく。守へ帰參のよとぶゆもなうじ。かくもと武運ふ竭  
ぬとぞ。罪造りか何をせん。今そぞえ期を究めよ。南至阿蘇院と唱へて。  
刀を抜く小腹へ突ちんとあうじ。鮮夜丁七左右より慌忙に携けり著。もん  
慣れてううく疑せらうとも。ひとくすくうまうふ。憑て爰の咎そじ。  
車怪くもわるく。この曉ゆかく方正へ告り。これ草津の旅宿を用甚の  
猪負を争ひ。洲之助といひの刃や命を隕す。三年以来艱苦編壁索る  
宝刀ハ珍めざす。やうな仇ゆ身を害ひ。怨ゆうて中有ゆ呻吟冤魂彼奴ゆ  
絢ア。との處へうせんと。洲之助と名をう。遠方よりある人あづへ勤げば云  
某とと見ゆ。仇人の齡ハ三十あまり。その面形は圓様くと示現。吾脩も  
あらせ。正夢か。今又何を疑へ。と名告う。そ破結す。仇人ハ剛勇たり。少  
きて某ハ瘦を負ひ。吾脩も既に危うし。年來祈念する金剛神の  
權護とおぼ。庭の槐よかどる旗雲障りて裡面へ入る。ありべれ。仇へ急地  
勢ひ場く。遂に駄を授う。とのとく。腰懸する雲霧をもや霧をも。屋の  
棟ふ異うる。の。啼声せてもひと怪。かそぞ骸の懷も。顯れ生く。一封の  
書翰をこね。あん牙の自筆。良人の仇とぞひ。仇もども。良人の縁者。

緯の本末同も定めを口へ官吏奉りて殺せられ物の祟歟。枉難の神の怒ふ事  
うれ歎悔しきるをもそろと身を責ても恨ても。又とよく過失は愧  
て五年未日どより。いとまろじとちふまが所天祐をひらし山主入るを  
面みづれど。つゝて死んハ冥土の迷ひこそ證據もなれども。三年の山主を  
うとおひく密通をあつりさん罪負せんと由縁ゆる入と密々殺一さん。  
恩愛ひとつの女児さへ售りやせ。と情なく。おひけられたことのこりうる生  
き。おと殺さうとする尼苦しく。とん盡されぬ濡衣ハ僻る尹君が誣言。人全  
殺せ。罪科を脱せんともせひ称ど操を破り身を穢す。良人の瑕瑠親の  
恥辱女子の大罪のみえ。不義奸淫ハ國家の大禁。童といふとも非を  
辨ふ。況や恥をもつて。下郎うつとも道うづね道ういで迷ふべし。ま  
目前誠心をうかべて。うる涙やぶさて疑ひと解べる。是も又一晩の後  
似く墓うた仰言ハ泡沫夢幻才の薄命をくみれと女房家業の非が  
遣ふが。却あく身を殺さうが。淮ゆうて月形の盜賊を索ぐた。何人うちの  
自殺を潔くと譽せん。つれさむ下ろも限り。情ほはほと勸解つ  
連う左右う。携方笛と。身巻きの上。小箇て儀。血の涙流すが。とた鞆糸の  
そづる恨ふ素大夫ハ。やも証果を。跡をうち掉。いひ訛ませと。づが自殺ハ  
汝本が情放す。うんよ其處退どや。と丁七と衝倒されとぞ。隙よ妻を  
搔とう。急地腹をうち切。う。ひと驚く素大夫ハ。妻の死。う。急地  
良人の刃を奪ふ。そ。吃へぐと突きよ。後まふ。と丁七。おのが刀代  
を。忙然と。まき又。深瘡ふ。う。二人が苦痛。そ。ふ。おほ。目滅拭  
それ。う。う。思癡。う。う。お。そ。人。疑。う。自殺見えと。あ。う。う。今  
丹田へ氣を活。う。う。う。と攻つ。れ。鮮衣。お。う。う。う。今  
う。

みをあれりなる日暮きて武參る。吾嬬再杖の間する曠野と過り。比々甲夜闇とより姑獲ふ石と眉それ洲之助へ喝す。人魄をうら薦す。かくて且く憩つる茶毘所の法師これを以て件の姑獲も人魄も今宵あゆく火葬する。惡女根坂が冤魂うるゝ。この婦へぬ此くと未細よ説あを。り打落せ一人魄を憩ふ葬す。崇ふよりて枉死せん兩三日逗留す。形のとく追告をとう行ひしひ孫と明く地を勧へぶ。これあはせんとかひひとも洲之助へやく後を剩彼法師を罵り罵らす。ひく茶毘所が鬧す。かは故に彼怨ヨ火吾們ふ馮徇り。墨裏うへつぶを入りて妻子ふ病難ありとどりせ。又ふ吾脩を病ふぐらせて洲之助をすぐこへりよせ豫て妻子の夢よ入つて。あれれ草津の旅宿みて洲之助よ駕せしと告て二人がもと借く。おもや渠を殺させさん法師の教滅告田とる。さればアそれもその餘怨あう縁く吾脩ふ崇らんとく。不善と妻子を疑ひを自滅せんとせり。欲洲之助が咎まれとん鳴づくるハ姑獲うえ現推ぎた怨灵の宗よりておん身ふえりう共ふ死を急ぎ。行人が殺其を脱るべき道へなうとも一人ふ一人の死でも支へ果を死ふ。その深癪で術も。雄く妻の賢才負操主ふへ篤ひ丁七が誠心。十年以来又よくあわす。何汚もする行ひある。ことを疑ひよひと羞く。又六元未入まうふ。おの過失より家衰へ三年以来一日も妻ふへ安らかひとさせど。それも勞してその功なく。面推減こそえむ。新護ひよりもなく。罵辱一めで自害させ。忠義の僕え失ふてと鳴呼と。りんもぬまう。あしと悔歎け。鮮衣も丁七も飲じふ。駄と擣かりひかじよ代の妻の崇ふとあれてぬま衣を乾らせる。一期の大慶。愉く目と閉。伊ふ。まこと今般ふも。又かほ楓がえく。波多と冊けく。山せよ。

弘法寺へ遣へられがい早ざゆふを。母と喪ひ又ふ父と旅行の趣なり。誰をも生盲人病りやせん。子がうつてよしと。丁七ひ伸めぐり。あら渡る奴が公鈍さま。今こそ娘がしづかして歸り来がた。ゆう事よ。ひ達トキ。うがどかと氣と焦が素大夫渡と禁ゆむ。楓がうべあく汝をうれ。アシあるかくふ餓も死ぬ。人とうなが佳塔グヒを擇く後の榮をまぐく渡るりあそじ。渠も又人の子なほ。これ等閑ふらうんや。と慰めても恩愛ふ引とくとゆ。王の緒の僅よ残れも哀れなり。浩然ふ予どもらへ。ひとかづげみゆき。あら母う何處よ。娘まは只今えりまし。まぞ徒然よ。とひつそとくに祝く。楓渡をりう共ふ。おひづけよ。光をかぶ。見る目かみごの驟雨。追あひく。客房へ走り集合つ。血玉塗立てる。親と親とふ。携乃裏縛向よ。ヨクふ声が惜き泣一々。丁七ひや眼を睁り。渡る泣ふ。泣ふと。死なんと。お親がくそりすく在るのえ。吾一命へ惜ひ足り。ひと惜きと。奥さゑも。おひて自殺トキ。お認も。主へ。入をせきて。彼死ふぬさせ。縁由へ。後こそあらん。汝が主君へこの娘の。主のあらぬ艱苦を厭ふ。父が忠義を本ゆせよ。つゞく。唯是の。と言ふせじくゆ。絞る声。み鮮衣す。見え。て。楓よ。アリヒ一候。お達せんと。おゆ。胸ふあれど。そともかうらぎ。おの崇く恨み。人を殺し。刃を殺し。母の亡日へ忘るとも。爹くふ孝行解り。おゆ。うそやかん。末セオの冬。生別世父。父うへ。さあく。帰郷。一。と。名生。もあ。どちまく。死別れる有為。そえ。おきよ。まき。あき。せ。轉変。浮世の秋の。秋の。只。と。人の。吹。の。秋。と。じ。黒。と。又。伏院。が。楓。よ。と。泣。叶。緯定。よ。あ。孫。ど。も。お。さ。か。さ。う。ぬ。う。の。あ。く。が。と。う。ふ。

代らしく。おんおへ存命あり。体。嗚父入。す。捨く出まし。う。三年の月日  
立。やれど。誓安時も忘。まし。面影を。觸るばよはん。邂逅。ゆ。せりふ。  
さ。俯。な。く。か。き。と。お。母。ひ。と。そ。う。せ。め。り。が。ど。や。み。ぐ。る。死。体。病。ひ。ゅ。を。故。ふ  
ま。う。あ。ふ。み。た。と。旅。か。ほ。よ。と。父。の。袖。を。引。く。く。推。体。母。の。膝。鮮。血。と。歎。を。親。を  
や。ふ。雅。と。主。と。友。音。と。す。く。渡。る。声。う。を。濡。る。と。か。手。下。涙。の。兩。ふ。  
翅。あ。わ。れ。て。哽。え。り。け。づ。の。経。日。娘。ま。る。と。倡。一。す。く。せ。て。在。山。せ。よ。と。児。名。の  
社。へ。緒。よ。と。宣。は。せ。り。母。賺。さ。わ。く。漫。も。彼。廻。へ。緒。く。ど。耳。持。も。せ。ざ。物。も  
え。を。耽。が。あ。く。せ。そ。主。親。の。今。般。ふ。あ。や。ゆ。ひ。う。う。又。ゆ。ひ。う。う。と。あ。の。世。ろ  
別。と。ふ。な。く。え。ん。こ。との。哀。じ。と。口。況。つ。泣。つ。轉。輶。と。応。ひ。ぬ。せ。ぬ。瘞。負。れ  
片。息。慰。あ。う。み。一。素。太。夫。ハ。玉。う。と。淚。を。う。拂。ひ。波。香。泣。み。ゆ。と。相。賢。元  
リ。の。波。ね。り。や。あ。体。大。變。凶。更。も。う。親。子。主。從。恙。う。四。人。回。を。あ。い。る。

矣。片。向。く。樂。一。か。ぐ。ん。か。子。よ。啞。と。そ。も。才。を。羞。体。親。う。ひ。な。く。と。これ。の。ま  
な。う。恩。義。の。駕。た。女。房。家。僕。救。す。よ。一。ゆ。く。ぶ。吾。母。よ。女。才。あ。ぐ。ん。娘  
歎。う。が。其。土。の。障。と。な。う。じ。ん。未。期。の。水。と。ち。う。う。な。く。立。あ。ぐ。り。つ。縁。放。り。  
覓。う。が。其。土。の。障。と。な。う。じ。ん。未。期。の。水。と。ち。う。う。な。く。立。あ。ぐ。り。つ。縁。放。り。  
裾。引。あ。け。う。う。悲。歎。の。声。を。竊。笑。武士。ゆ。り。誰。と。同。ん。も。ま。う。ぎ。と。吸。え  
柄。放。の。水。鏡。う。せ。ど。も。い。と。間。遠。ゆ。く。顔。不。定。う。サ。エ。ス。ね。う。く。

○著作堂編述出像國字小說畧目次 群玉堂藏版

賴豪阿闍梨恠巣傳 前編五冊 後編四冊

三井寺の阿闍梨賴豪が巣と曰く奇談より木曾義仲都登りの因縁清水の冠者義高

巣の術と行ふの奇談猫間新太郎の復讐の辛苦烈女唐糸の忠臣をと古今に秀一物がくへ

夢想兵衛胡蝶物語 前編五冊 後編四冊

有名ふる作者の博識ありて未見ひく世界の鳩々理屈かくまうすれども腹と心身

自然とやうすがゆの如文六千六百六十二篇にしてかくとちぬ面白之文是常のよき本を拾取し智慧がみ

絲櫻春蝶奇縁

前編分卷五冊 後編同五冊

皿四鄉談

全八冊

稚技

前編分卷五冊 後編同五冊

皿四鄉談

全八冊

稚技

前編分卷五冊 後編同五冊

常夏草紙

全六冊

